春色梅こよ美巻之三

江戸 狂訓亭主人作

第三齣

九年あまり老婆十年まへごろ。紀衣きとかれて乃人まで面白き色の浮世の其中に色々集へし一廓盛久しきとその里に。唐琴屋とて聞えしハいと賑ハしき家なりしが主夫婦死去なく血筋の娘阿長とて今年十三の形容まきと両親なくさまべ鬼兵衛とかへる後見が心よろ

られ勤止も親類縁者あしれ田家又本店の持園か
その本家へ仮鬼多勝ぢ知りあく櫃瑾をとりゐえ
王言文も流切わうして弟めあさ人く唐琴屋のあつまの
どぞく弟吉ましま意をりくど肴をわきあう人もなく。
女郎難楚ふ発明なる者へあ旦ども絵金ふるく旦し
身田家後刀ども主人ふ同し鬼多勝つく流ゐそつく
老もるく只先主人のあつきし自をを言ひし上六つぶ母く
のミせゝ詮方もあうくしぞ斯く此ありの手あもらんこ

匠の手と孫お蔵あり。筆手ぎはゝきり男ぶり系手ざて
積日多く。内外の老の思ひくらべても重なり華屋龍宮
お針が三の和の噂さも。賞る花見好きさゝばとぞえと
すゝめあくれさと女さへ〽つもまだぞよねぞと廻し盤。
色く里の標拵つそ雛ままさしきに直清まるるまゝり。
頃しも春の梅どきまでんじふ開く鉢植の花の香
うれる風呂みぞう深役目物はきゝ人まゝへ雛負女子
あきや今日ぞ皆の一家深初と振るゝ時も己の刻まで

まうして朝寝坊へおれハ昨夜明白ゆゑの御ぞを召て

これ見事なおあつらへん此方から〳〵のうちへひそかくと。

頭くつの肉ぞ着被衆八と称めのなり「モシヱ

おめへん拝きやうのへおきやくとんのとるへ死でもつまらねへ

世へ去りゑんヨトいつ「アレサ此ちからハヨそんなの浮気

ひよつとたまぞ来るとつらうヨ今さらん浮気

早く顔を見て下へいるヨ何もあんじる事へねへヨ

そして他はさうまをさうなヨ「宜よくありがてへ

しゝ蔵さんがおもしの内も他人よりかまはさうなさうなのが
私きのよふなものでさへ面目ござりやせねへ「ナニサ
そりやあのまうの氣性の蔵さんじやアかまはねへ
顔んごとけごとのそれをいとうくあちやア出来ねへ。
世話ごとのを縄るヨマアくおのくふ他しておきるヨ。
何ほしても今夜もまた女を嫌ひくはいもんどうト。
しまのうちらちらを　よね「ヲヤお長さんの男貴やアあのま
しづくのなどよく
甘んかねへ　はいと「そんな早くさ人雄すくさくれ顔をする

さんなヨト いの頭きうづをそれと
あけるがら此あの姫なも
「おあらん お産あらん ト つぎの
ゃん
ハ「アくざしきざんすヨ おもさん
ハ「ハイト 本同へ お遠
入るんし 夏ト いひるがらうれの
ひるをうへよねハ
ひ 二丁サ 米八ぎん 今の通りざ
ぐら。どのぞお氣の毒ながら
そのおもつておくんなんしト

ふくまでいかなよねはもよね「アレサ
なぐるぎきこれもけんぞんな
私のまことこころく有(あり)まれ[illegible]。
ずんぶんそのおもひやうのサト
いかなぐらいとこころくらうへ出て
申くりちぐへておもハあるまたいる
の屋ねへ蔵(ぐのしや)若ごヨウト[illegible]
いふ「おあらんなんでござれ
まれ「ナヲニちろせしこと
て「おあらんが腹(たら)をおたら

るきることぞうらよくなことぞこぞれやませう
外のことあらコとちきやうのふ成らしけ他と顔をあらぬ
合ゆいと思ひく善ごらんが彩造元ごらんが余
ぱどき氣をつけてゆるまきまんアな。いうなこゝてもあきれ
たぢやうおぎんせんか
「どんしこんでどぎれまたは
「私
きをバまるでとけましてゐるんでざんさうな
どおきゐきとれようそのあつて
すめバそれぞとすのうやうし
「茶八ぎんハ目頭男ぎらひぎ
の。ひと他がいつてあるしやうあるまませんか
「男

ぎらひごろ。男好ごろ知ませ女ア志ませんハ私きやう
まさこ先の出よりで是だろうりハお様で出やうノ志ゐ
せんハ。彼奴を出せる私きが出る。二ツ一ツ方をつけな
人間ちやう悔志うざんを鬼を清どんが言るのを使めて呉
ねへこ内訓へ長産て女ゝまゝにヨト
あらんしくいふ是よ。
こゝのあらんの蜜人蜜といふものとよね八とのろをせしおもひきをとし
ら人をまゝを出糸が女ゝましくひひ出して。よね八左女もくとんらが出
の中のがうなつ丹沢ハ。もとのいゝ者のあさをもさるぐきりのなりしを。
なりてのち。借金おわく。志んやうこちがこれ。まゝよかしに女ゝそまづう
まゝ。もしきゝなどなまゝバとそうり方をおしうけ。鬼を人といふが浚尺してすぐを
ゐ丹沢ハひらげの身となり。こんきうの女うチをきて氣のぎくにおもひ。

このおいらんが袖は。手前ら米八さんとやらの義理となさけのとんだ今そ。
いとこへもまへがなり。おまへそうまでしらばゴテゴテのひようずけ丹
深三米八とヨロけの手前ーエをかねてきつーいすとしくい 主「ヲヤそれでご
きてらがあまりよねハまでのさまのうちのさの
ざいますへ。家ねへいまんであるまするねそろそふそふ
えりー とし詰ニつまそ薬をあげもやかおんぢおいらん湯白
のど呑へらつぎますせう 久ト 手りそつぎ 主「おいらんへ今の
よめまお言ぶがね私八お主へが 関所へするろしくろ
何ゝするを寛みとまるろく。ぞかぞれ様あるひで
世話さてあんかんるまされョ。ひょうとおまへがそふのみと

時しも菊月初の七日れ夜里満の頃ふるんはどめて
戸の告らるを聞て

かくばかりゆきしれ雪がくまるとゝ見ゆ

まゆゝ川さみ屋らん　たろ戸のこゑ

こまたはさておき彼おもはゝ山系がゆとゆきしき言葉。

なるつト　とゑをくそ男をふる　おもはゝ

なるに言てお呉るさらるを私ハモウ　母人でゞもあるよみる

男ハまてうるしれ　ト　すてをうまずるひぎのう人肩ねひあげの
こまたさへせまれ娘のところねをぎ川して

〽こゝらでおのがあいだ 此「コレ二しも何の関係ぞろ一人なくだ
のなまみなまりのなまみまう
二人までも世話をしてやるのハ ゑ「エヽ一人なくだ
二人とハエ 此「エヽ何サおまへさんも気をませサト ゆき
らして
酒を呑 そして此ぞんハ下のハ下のはたらけんの 機嫌がよゐ。
おざんすなへ を「エヽ私しやア実にすまねヨ いゝよ。
ござりますのハ いや。聞かれくさやバ あの通り いゝじやて 妬き
晩女のまなしく。マア どふしよう しらぬ人 それがあつて
ても お兄イさんハ 二なん…… のまなにそびらにまた…… 何所

八橋舍

どふして此世をへるやら。とんとわたしやつらい思ひをするわいな

ちりとも紛れる事もないでござりますが下　またさいはひおかしきを　ござりますがなくまし

以「十二才お嫁入するものでなれどやるし七法をうけそト言てゐれ

ゆえ家内愛を見て様子をさせるのも悦と手紙もやりともあります

まかり。

せうく子がうらやましくはござりませぬ。思ひもよらずのぶん今の内ハ

機嫌よく用を足ますしヨ。産業のもののが今場所も

上つて来るとまるよぎりんすうら早くをへ。泪きんしヨ。

それぞれ安心するなんまする　長「ハイあなたゞこまつてゐるのでやア

下へ往ますヨト　立て次の間へ出るところをそゞろく　禿「ヲヤお
かけくるうしろすがたをあけて。
長さん今下の方でそのそよ悋気いゐをヨまをやく書
懇ろをまくおしらます。アゝ意地悪ち根性がお
そろしい男をそちまんを嫉ましい顔が顔のヨ「志
げなとやなんど其口ハ。おちやうさん早く下へ往なんしヨ。
これいはとハおぎさんせんハ子ト　いへどもさくハ落くさげらふいひ
鬼ゑをあてさとらしかるるさ世のならふ
しくそふでみる。ゑげるとや一連付て廻ろ見て来やる
みもにかし
言が知るとうとみのよ「ぢゞあえんきうれしう来て

喜三さんしヨト おろく頭をとく 此「うそかほんとかいやらしいやつだ

のみやんは米八さんもあの子も。どっちをどうともいはれ

ねへから二人ともおまへさんに苦労しそうなものハいのち給 ○ゑ

の因縁ものトつく。ぬしがりばよいのがつらいとゆうが見へぬを おまへさんもしんぼうしてくださいをあけて ぞん「あがい

母 湯がなかしころの子 此家のみな見とおり 呈らいそくうろ 此「アイサ 相娘ようるがいきまへん

喜三子。お手子さん今あがり川で病る死。下でるんぞさうさふ

ぞ言がでい出ましくさんどろく「イヽエ気がつきやせんヨト

いなさるくみ発 発「アノウおやおらんで又子あの喜伝ようがおとち

かけて歩く

やうとうら。早くいつておあげるあしエ
ヨト うふそうをたれ　おだん
ちううへいぞる
「やうとおまさんのことをきゐすか。うまい
そのなきぞくやーうちゐ
ゐるつくゆるんぎんすハるト
げつ来。出浦をとろくきつけ。そしてのかつ出くこゐ志ゐ
た。夜さんの夜を巴風へちよりと持て住く来やヨ。そ
志て金ゐ糸の柏風が来ゐてゐ。八翁の浪笛を拾遺
の玉川を持て来なと。そのいふのごヨドンおゐらんの来

さる事もらぬうちト出して案をめぐらす
作者曰この草紙ハ米八いまだ事にうとき人情を述るにあらず
すまで青楼の穿鑿記さずゑ来予ハ妓院に跡を絶て
唯そのおもむきを男女のことにも洒落本とおもふべく
評しあるところ一回筆をとるのみ一條おもふべし
二言ひとのくちしきを見て父母のことを大事にかなし必ず
志も作者そのむきのあるべき世の中只今おもふに限らんや。
父母ますます人ハ他人の為に恥しめられまじき

金澤名道

らるゝこと二重ゑまさまる人もあらん成長(ひとてなる)すれば父母の此世に在ぞ(このよ)今(います)ともすでいとあるまぐこと(ちゝのこと)なれば(ちゝ)

ミまへり。

あるとおもひなりのすきみにつゝうまし

なくてぞいまハ人(ひと)のとひし事

第四齣

「サアく(くも)お娘(むすこ)や出(で)なまへく(うどのうちより)

ごくらう

ハイく大和に問苦労(ごくらう)でありがたふ。そんなら愛(こく)が金(うな)

ふりすけ
雲(ふ)ぐども但多人
よつでなるを産(ふ)
始

雑の雲「サア其の金沢へハすぐ一里。金沢よりの金ハ
なる。あの人の器量色ハ拝組も仲ゐの奴おも息杖不守
をもて居るれ丁場。息つぎをしてまいそびれバ「言
いひあへし三信切仲るきひを近所同ちよし心へ。
無行のあそこゐる。お嬢を正直ハ取すゑて念佛譲をたし
めろつのをな行。縁と婦くもあるめ人が雲「サアくおかる器を
出るの世へくトどのすゞれとそれをあげられ 娘「ヱそんなら
それおまてろやとた。そもそもマアとんな淋しい墓所で念仏

誰と母さんがお言ひこれまで私が坊さんで只あるまいし よい女
去く正儀ふお念仏が 「ふてへらまねといふまきそうも
母が子あるをおいて娘は此弟そんなる世間んだことりのへ
子があるものをそんなるがおめくを相手にして万遍を
勤るのでさアく早く出ろせく ト 引出されてなる
家の主 娘「そんでもこそしいこのろくでなしめてく
るうくまで母ん百万べんをするまるく私を今度の親さく
へ送りて泥で中るりッと 推参「どうで中まる抱まて探よ

ありハまるよふな好男(いろおとこ)ハ。一人も見えねへこの集(あつま)る「雲(くも)よ

よく。いづれましても参詣(まゐり)る仕業(しごと)。大工(だいく)ノのねへうちお(ちうを)

ちやく「藤(ふぢ)参(まゐ)るがく本堂へ。サア天井(てんじやう)のねろうびく。

ト思ふ人よふくぶらくとふるへる娘の手をとれバ 娘「アレ

およぞ堪忍(かんにん)して下さんまし。年も若いで高慢(かうまん)な。

ことを悟(さと)くもありますまいが。私ハいくらづけのお方の為(ため)

ハ神さんへ願(ぐわん)かけ。奉天さまへ吉めして男の手よ

もさらるまひ三年の中(うち)ハ断(たち)しひ人よめくり逢(あひ)も

それまし荒寺の化物すごくあらはれけり。「しまらく
お娘やおゞんでよけれど此方があゞむぶつで叶はね
此不届自由にならぬ川てめへのうち。泥まみれ寝まぞ
地獄へおすむ「そちはよくもぎゝはれエもねへ下袖
ある袖をふり構ひなく贅美を尽してあらはれる　娘「アレヨウ
どうぞ堪忍してお呉なさいヨウ。そのかはりにこゝにおきやげ
おゐらんまゐつて来た。お金があるほどありますぞへ是
と私が此着物もみんなおまへさんにあげますから。

おのれらんは貰(もら)ひ紅麻(ひぐの)子(ヒ)の此肌(ちのみぎ)若(ヒ)をひとろ
もらんぐらいとうろ。あれは三人ならのものにして。
ぞ一所(いちしよ)に寝(ね)るはアレしく浮生(ぐしやう)ごろくト迷(まい)げ廻(まい)
るを退(おうとり)居(ゐ)ないして悪漢(ゑんもの)どもは取(ひ)居(ゐ)引(ひき)うづ形(のき)
ある月の本堂(ほんどう)。遠慧(えんしゃく)今(ぎ)釈(ぎ)もあらんは男(おとこ)ぞやめき
こうく連立(つれだち)行(ゆく)。
そもく此娘(ちのむすめ)は何(なに)ものぞとは庫(うくと)琴(ぎ)屋(ゐ)の娘(むすめ)お長(てう)なり。
いりぐして此(ちく)所(きこ)に来(きた)りしをいぶ(ぬ)はぶ彼(いろの)おのれん

よろ直に落せしなり。ことしきりしなぐら途中の
用心までぬぼうざうましハ。[illegible]廓育
こぐらなるとども旅といふ人のぬぐうざるハ海ん
あぐけなき傾城[illegible]。[illegible]長が
姫ひとかしてふくぬなしてなる。
ちぬ生波る初夜の隆[illegible]里山野にとぐなしていた[illegible]
淋しき古寺人うつぎとまし彼長鶯ふとしし
ちり
小そるにもなを増りしうる[illegible]さも晴れ知ぬ雲夜

ぼ。寺の襖戸を引あけ。お長が襟に押倒し▲サアく
まんぐちらをする寛姿ぞんぞく〳〵。ト既みあぶなき地獄。
の責苦を数へつくすすぐ時に後のくらぶりうち
そうとお長が耳まで口とよつくく人来りと言葉のいはしよふ
女とともくなぐら引まで言まぞく娘のよふな雲娘
ども八氣もつだ。寛姿を多年の空蕩時人。ワアツト妻うけ
る去人田でぶ糟を退在て厘去ども世ゐぞうりそそく
つくあめくる白引の盗人めくら侍らゑ。しろうらん者ぞれ

一人も逃せなくと。ほりくせかくこらして元来ニ居
の人那人なちらぐに逃出せ。おかれ如何
引て。あくれ如る勇ことごとき月夜にぞうまする。
素顔の高尾な中年婚月諸ともに横にさして。
掃も那代の本稲本秋田といふ。雍甲の酒落て出
立の旅姿
「ヨヤくおまへたちハ宝そんなにつまつ
くりてもいくじやうないう人。こんな逃ぐ志まつたのに
「ぞうなつくな東ちなぞコレうぬらうもね人

頓智(とんち)きこめてぶらア。ヤイうまそアが見ゑ。ぶまでござ思ひ業(おもひどろ)。
流人(ぷうにん)あゐ　つれ「ヤイ耳(みゝ)のあるやとうろぷぢろてよく聞(き)きをやがれ
忝(かたじ)けなくも尊(とふと)くも小梅(とうめ)の姉(あね)ご(ご)おかゝさんの弟分(おとうとぶん)吉風(こふう)
ゐよりめぐろくろまろくの龍(つまごう)吉さんともまをしまするのでござ
ますこ人「とこをもおろりやそまでしハ。小梅(うめ)の里(さと)ふ人とゐりし庵(ろう)の
けん嫌ふうそうまでも元禄平(めきりのう)のやうふしてそて梅(うめ)のお生(よし)が
いらうんと「一家ぶのぶん」。女ていしの權八(ごんえち)さんぐぞ塗縁(ゆかり)のいろの
そこの女およし「とまサくおもへいそらやア　あきされるきハどい所(とこ)で

ちやぢん
茶屋宿をすらア　又六人　「遠人ねへやうで立まハり役させ
女　「ゆんまおまへハアさぞこうろうこらふ。モウく
ぜうが　○コレテ　うめ　かゝあひ。　よし
氣をすぶまおもちヨ私ハ山梅の女髪結おまをいハ
○え　しぬ　べんてん　ぐうん　ない。
まるおそんこもの江の濤の妾天さまへ大願て月をあり
ぬきすぎ　○コロ　しゆ　こち　き　○あねど
役にこてすも行るが花イ流達の茶まいつで好所く
こそ　○うれ　うねがれ。
と立られが姉しいと。いふもちろと自惚志りし今ぢや
あんま　ぞそ
人まも知て是解ハやうけてこともねへ女伊達らのおちやら
○え　しぬ　久　こち。　くつ
びれ江の濤うらの敵り居こんなが　こもそふ居くきを喰て

どふぞ注「そうさアうるさいだ。なんでもない。閻魔(えんま)大王(だいわう)が
気(け)づくまいぞ。主人(しゅじん)の耳(み)のうちへよく聞(きこ)ゆ人ハ。
送(おく)るにハあろう外(ほか)先(さき)の請(うけ)でもコレさへよくすぐが私の
宅(うち)へ連(つれ)てくる人(ひと)く。さあつが来(き)よそがでのよふな屁(しり)が
来(き)ようのがさし合(あい)そ。公(おほやけ)儀(ぎ)へ対(たい)して済(すみ)が立(たち)ますまいやア。
利屈(りくつ)のコウロつくけんくわとなるやうな懐(ふところ)ゆえがらう屁(しり)おしぶ。
マア何(なん)ぞよしろ夜(よ)が更(ふけ)たらやア。藤(ふじ)宮(みや)にとまるコレさまに
なる。夢(ゆめ)みんなが此子(このこ)を中(なか)にはさむとんでもないのろうが。

法人しの用心して

ごぎい母せんるんるら私がおぶつを上ぎり

さんや添きんまハ頼むめ人栄きんか金をきんか。冷希

ゑらバおまぶぶ其和人娘の子の番ハ賞来ねへト笑ふ

あもすと曇る朧月夜に母うくと里ある方へお連て。

たどりもしとそ頼母しけれ。

春色梅お与美巻の二ヲ